

# 家庭科における製作学習に対する意識と 自己効力感との関係

— 中学生の製作学習による変容 —

鈴木明子

(2012年10月3日受理)

A Study on the Relation between the Consciousness of Learning Sewing of Home  
Economics in Japan and Self-efficacy  
— Transformation of the consciousness of learning sewing of the junior high students —

Akiko Suzuki

**Abstract:** The aim of this paper was to investigate the consciousness of learning sewing of home economics and self-efficacy of junior high students before and after the learning, and to clarify the relation between the consciousness of the learning and self-efficacy and the transformation before and after the learning through the observation of a teacher and students in class. For the first graders of W Junior High School in K City of Hiroshima (57 boys and 44 girls), I investigated before and after the learning for all 12 hours of sewing the book jacket that was introduced a portfolio considered to be effective for self-evaluation (September 2012 and January 2013). The investigation items were 21 items to ask the consciousness of the acquisition of the sewing skills and 18 items to ask the generalized self-efficacy with four phases of all evaluations. Furthermore, I extracted the students who had either high and low feeling of the generalized self-efficacy, and observed their behavior in class (October and November 2012). On the basis of these results, I analyzed the relation between the items by Pearson's correlation coefficient and caught a characteristic of the portfolio and the behavior in class of the extracted students. The generalized self-efficacy was high as the student whom the self-evaluation of the skill was high. After the learning the self-evaluation of many skills became higher. In addition, there was seen a difference in the score of the challenge factor of self-efficacy before and after the learning, increased after the learning. By the pitch of self-efficacy, a difference was seen in the description of the portfolio and a behavior in class.

Key words: self-efficacy, home economics, sewing, consciousness, junior high student

キーワード：自己効力感、家庭科、布を用いた製作、意識、中学生

## 1. はじめに

近年、ものづくりなどの体験的な学習が重視されている。一方で家庭科では、教科全体の時間数の削減に伴い、布を用いた製作の時間を十分に取るができない状況の中で、児童・生徒の製作技能も年々低下

る傾向にある<sup>1)</sup>。製作学習では、知識や技術を習得し、それらを活用して生活に役立てたり、生活を豊かにしたりするだけではなく、製作に継続して取り組むことへの満足感、作品が完成したときの達成感や自信を得ることができることが明らかになっている<sup>2)</sup>。PISA調査(2009)においては、我国の子どもたちに、学習

意欲の低下がみられ、その要因の一つとして、自分に対する自信の欠如が挙げられた<sup>3)</sup>。家庭科の製作学習は、このような子どもたちにとって有効な学習であると考えられる。

自信という概念の一側面を、自己効力感で測ることができる。一般性自己効力感尺度は、個人の一般的なセルフ・エフィカシー認知の高低を測定するための質問紙である。セルフ・エフィカシーとは、何らかの行動をきちんと遂行できるかどうかという予期のことであるが、そういった予期の一般的な傾向を測定するために開発されたのが一般性自己効力感尺度である。自己効力感には2つの水準があり、1つは課題や場面に特異的に影響を及ぼす自己効力感である(task-specific self-efficacy: 以下 SSE)。もう1つは具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である(generalized self-efficacy: 以下 GSE)<sup>4)</sup>。SSEを高く認知したり低く認知したりする傾向は個人によって異なり、GSEの高低が個人の行動全般にわたって影響する可能性がある<sup>5)</sup>。GSEとSSEとの間の関連については、GSEがSSEの情報源となる、あるいは、GSEがSSEに影響を与えていることを示唆する指摘がある。本研究では、GSEの高低と家庭科の製作学習への意識の差異との関係を明らかにし、GSEの高低を考慮した指導方法への示唆を得るとともに、製作学習の体験が、GSEの向上に効果的にはたらく可能性を探りたいと考えている。

被服製作学習への意識と自己評価及び自己効力感の関連については、大学生を対象に行った研究はみられるが<sup>6)</sup>、中学生を対象として製作への意識と自己効力感との関係をとらえた研究はみられない。そこで、本研究では、中学生を対象として、製作学習前後に、製作及び製作技能への意識と自己評価及び自己効力感を問う調査を行い、さらに授業観察を通して、それらの関係を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 製作学習の概要

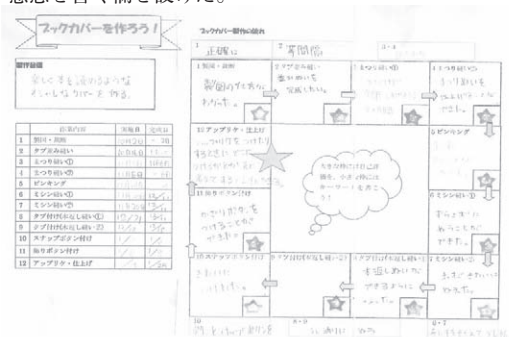
製作学習の授業は、2012年9月～2013年2月に、広島県K市W中学校の1年生3学級の生徒101名(男子57名, 女子44名)を対象に行われた。指導者は、教師経験10年以上の同校家庭科専任教諭であった。製作題材は、教科書用のブックカバー(資料1)であり、小学校及び中学校家庭科における布を用いた製作の基礎的・基本的技術の習得を主たる目標とし、全12時間の題材として展開された。また、自己効力感を高める

工夫として、意欲を高め、積極的に取り組めるよう、ポートフォリオを導入し、工夫した(資料2)。授業は、家庭科教諭の指導計画に添って展開され、ポートフォリオについては、筆者及び教員養成課程に在籍する教師志望の大学4年生が提案し、家庭科教諭とともに内容を検討し、導入した。



資料1 製作題材(教科書用ブックカバー)の作品例

資料2は、生徒が記入したポートフォリオのおもて面である。ケント紙を用いて両面カラー印刷し、三つ折りにした状態で生徒に配布した。おもて面には各自の製作目標、作業内容と実施日・完成日、ブックカバー製作の流れを記入できるようにした。また、ブックカバー製作の流れには、自己評価と作業のキーワードの欄を設け、振り返りながら製作を進められるようにした。キーワードは、作業の要点を理解させるために教師が提示した。各作業後には、教師が内容を確認し、ポートフォリオに印を付す欄を設けた。裏面には、完成図を描き、友達の意見を記入してもらい、製作全体を通しての評価と努力した点・工夫点、自己評価や感想を書く欄を設けた。



資料2 生徒が記入したポートフォリオ

### (2) 学習前後の質問紙調査

3学級の生徒101名(男子57名, 女子44名)を対象に、自己評価に有効と思われるポートフォリオを導入した前述の12時間の製作題材の授業を行い、その学習の前

後に、製作や製作技術に対する意識及び自己効力感についての質問紙調査①及び②を実施した。調査①②の詳細は次に示すとおりである。

#### 調査①

時期：2012年9月 第1回製作学習前

調査内容：小学校での家庭科の布を用いた製作について、製作に関わる技術の自己評価、製作に関する意識、一般性自己効力感（福井らによる児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 GSESC-R）<sup>7)</sup>

#### 調査②

時期：2013年1月 第12回製作学習後

調査内容：ブックカバー製作について、製作に関わる技術の自己評価、製作に関する意識、一般性自己効力感（同上）

### (3) 製作学習中の言動観察

さらに、自己効力感の違いにより、製作学習中の言動に差異が認められるのかどうかを明らかにすることを目的として、学習中の言動を観察した。3学級のうち1学級（男子19名、女子14名）を対象とした。観察日は第1回2012年10月2日、第2回11月1日、第3回11月20日の3回であり、観察方法は、ビデオカメラでの撮影、及び生徒及び教師の言動を直接観察に基づいて記録した。観察対象の生徒は、学習前に行った質問紙調査により、自己効力感の高い男子N（♂）、女子S（♀）、低い男子Mt（♂）、女子Ms（♀）の計4名を抽出した。

抽出生徒の授業中の言動について逐語記録（プロトコル）を作成し、それらを基に抽出生徒と教師の発言や活動を、調査結果との関連も併せて分析した。

これらの結果をふまえて、製作学習に対する意識と自己効力感の関係を明らかにし、製作学習の指導の工夫について検討した。

## 3. 結果及び考察

### (1) 学習前後の製作や製作技術に対する意識

製作や製作技術に対する意識を問う自己評価を行った調査結果を分析し学習前後で比較した。3学級全体の学習前の結果から、各学級に大きな差異はみられなかったため、授業観察を行った学級の生徒の学習前後の結果を質問項目ごとに図1に示した。

学習前の調査では、手縫いに関する技術の中で、玉結び、玉どめ、なみ縫い、返し縫いは、多くの生徒が「上手にできる」、「まあまあできる」と回答した。他方、玉どめが「できない」、「なかなか上手にできない」と答えた生徒が2割以上みられた。ボタン付けも2割以

上の生徒が「できない」、「なかなか上手にできない」と回答した。さらに、三つ折り縫いとまつり縫いが「上手にできる」、「まあまあできる」と答えた生徒は4割以下であった。まつり縫いは、小学校家庭科で学んでおらず、この時点では妥当な結果であると考えられる。ミシン縫いについては、直線縫い、ミシンを安全に扱う、ミシンの糸かけが「上手にできる」、「まあまあできる」と答えた生徒は8割以上であった。しかしながら、ミシンの下糸巻きについては6割にとどまった。ミシンを使用したことはあっても、下糸を巻く機会は少なかったのではないかと推察する。チャコ、裁ちばさみ、まち針の使い方及びアイロン安全な扱いについては、8割以上が「上手にできる」、「まあまあできる」と回答した。

また、作りたいものの型紙を作る、目的に応じた縫い方ができる、トラブルが起こったときの対応等については4割の生徒が「できない」、「なかなか上手にできない」と回答しており、製作学習に不安を感じている実態がみられた。

学習後の調査では、製作技術に関して、ミシンの糸かけ以外すべての項目で、「上手にできる」、「まあまあできる」と回答した生徒が増加した。特に増加した項目として、「三つ折り縫い」、「まつり縫い」が挙げられる。題材のブックカバー製作に、これらの技術が含まれており、習得することができたからであると考えられる。ミシンの糸かけができると答えた生徒が減った理由として、糸をセットした状態から作業を行う環境で実習を行ったことが考えられる。

また、作りたいものの型紙を作る、目的に応じた縫い方ができる、製作の工夫や手際よく作業を進める工夫及びトラブルが起こったときの対応等については「できない」、「なかなか上手にできない」と回答した生徒は約2割まで減少し、製作学習を通して技術を活用する力について自信をもった生徒が多いことが推察できた。さらに、実習中に自分の役割をこなし協力できることについても、「上手にできる」と回答した生徒が約2割増加し、製作活動を通して、生徒相互のかわりが効果的に行われたことが自己評価につながったと考えられる。

以上のように、学習前後の調査結果の比較において、技術の習得については、小学校で学習経験のある技能及び中学校で初めて学習した技能ともに自己評価の高まりがみられた。さらに、それらを活用する力及び他者と協力する力についても自己評価が高くなり、本題材の学習成果が明らかになった。

次に、授業観察を行った学級の生徒のブックカバー製作の題材学習においてできるようになったことの結

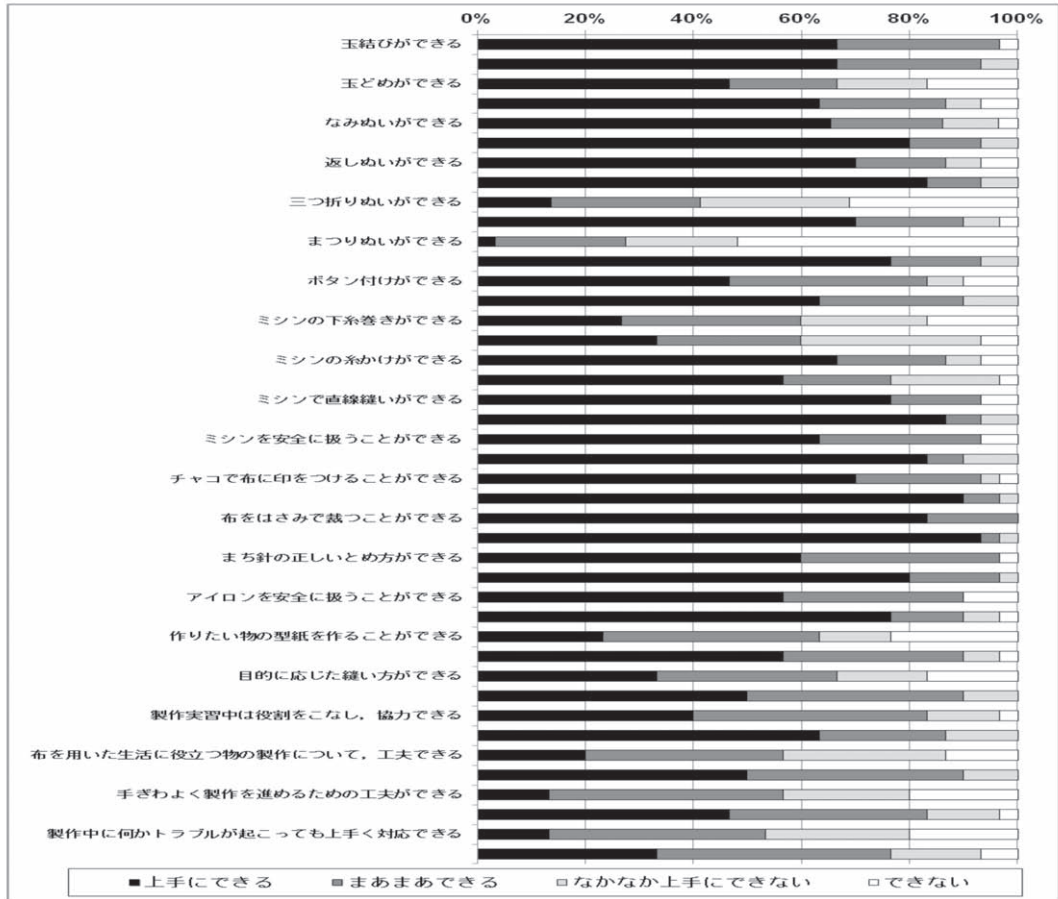


図1 家庭科の製作に関わる技術の自己評価（授業観察学級の学習前後の比較）  
各項目の上段が学習前、下段が学習後を示す

果を学習前後で比較した。学習前後の結果を質問項目ごとに図2に示した。

全ての項目に対して、「とてもそう思う」と答えた生徒が増加した。中でも特に増加したのが、「ものをつくるためのいろいろな技能を身につけることができた」であった。製作の過程で苦勞をしながらも、作品を完成させたことによって、多様な技能が身についたと生徒自身も感じる事ができたと考える。また、学習前調査で「とてもそう思う」と答えた生徒が最も少なかった「問題を解決する力を養うことができた」の項目に関しては、学習後調査で増えたものの、項目間で比べると最も低い値を示した。題材の学習展開において、基礎的・基本的な技能習得を主なねらいとしたことによって、なぜそうするのかという各技能の根拠を主体的に考えさせるには至らなかったのではないかとと思われる。

## (2) 学習前後の自己効力感の変化

本報告で使用した福井らの一般性自己効力感尺度は、「安心感」因子と「チャレンジ精神」因子の2因子に分けられる<sup>7)</sup>。学習前の3学級全体及び授業観察学級の一般性自己効力感得点とそれら2因子別の平均値を男女で比較した。授業観察学級は全体平均値と比較して、男子の「安心感」因子及び女子の「チャレンジ精神」因子が低いものの、自己効力感得点としては大きな差異は認められなかった。自己効力感は、男子より女子の方が高いという結果であった。全体としては2因子ともに女子の方が高かったが、授業観察学級は、「チャレンジ精神」因子は女子の方が低いという特徴がみられた(表1)。

授業観察学級全体の学習前後の「安心感」因子の結果を項目別に比較した。「何かをやったあと、失敗したと思うことが多い」以外は、学習前より学習後の方が「あてはまる」と答えた生徒が多かった。しかし、「あ

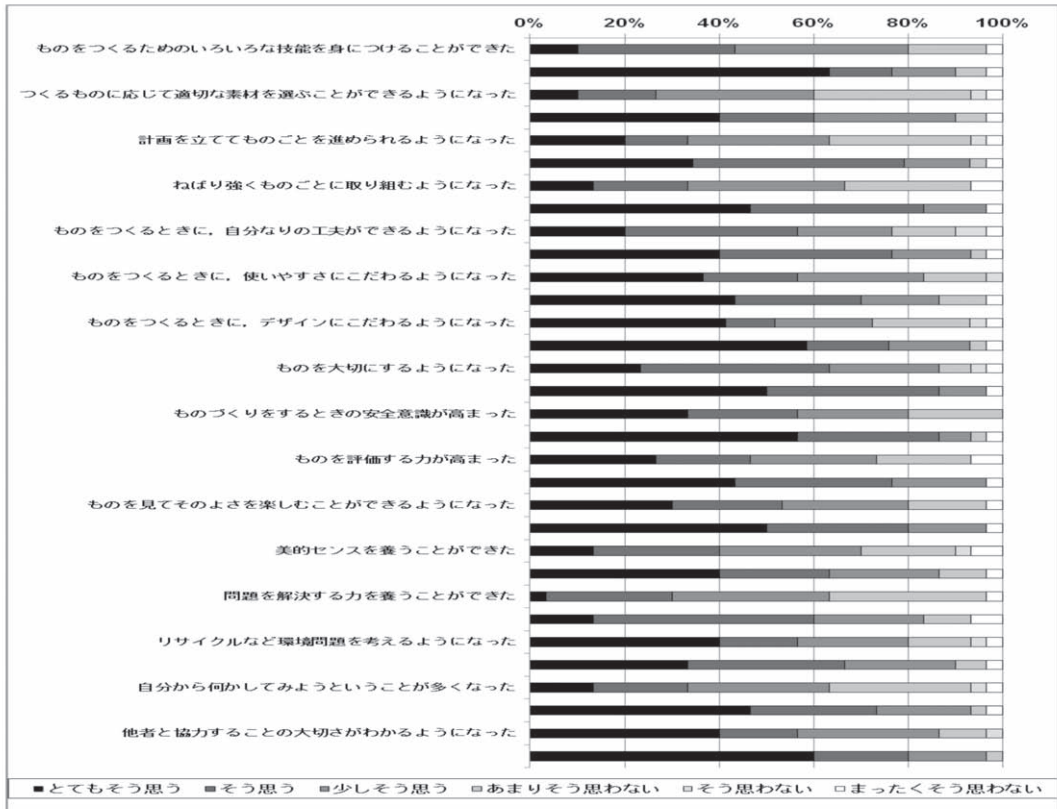


図2 ブックカバー製作の題材学習においてできるようになったこと（授業観察学級の学習前後の比較）  
各項目の上段が学習前，下段が学習後を示す

表1 学習前の3学級全体及び授業観察学級の自己効力感得点と2因子別平均値（男女別）

		自己効力感	「安心感」因子	「チャレンジ精神」因子
3学級全体	全体	2.63	2.65	2.60
	男子	2.50	2.44	2.55
	女子	2.75	2.86	2.64
授業観察学級	全体	2.60	2.66	2.54
	男子	2.47	2.37	2.57
	女子	2.73	2.94	2.52

てはまる」,「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒を合わせて比較すると,「失敗したことやいやなことを思い出して,暗い気持ちになることがよくある」,「どうしたらいいかわからなくて,まごまごすることがよくある」,「ひっこみじあんなほうだ」という

項目以外は,学習前より学習後の方が少なくなったことから,学習後には「安心感」因子に影響するいくつかの項目に変化がみられ,自己効力感の高まりがみられたと推察できる(図3)。

また,授業観察学級全体の学習前後の「チャレンジ精神」因子の比較においては,すべての項目において差がみられ,学習前より学習後の方が「あてはまる」と回答した生徒が多くなり,自己効力感の高まりがみられた。特に,「困ったことでも,何とか乗り越えられると思う」,「友だちよりも,ものごとをたくさん覚えることができる」,「自分は結構できるんだと思っている」の項目で,「あてはまる」と答えた生徒が増加した(図4)。

さらに,家庭科の布を用いた製作に関わる技術と自己効力感の「安心感」,「チャレンジ精神」因子の項目間の関係を Pearson の積率相関係数によって男女別

に分析した。表2に3学級男子全体の結果,表3に女子全体の結果を示した。

男子全体では,「目的に応じた縫い方ができる」,「作りたい物の型紙を作ることができる」,の項目で,安

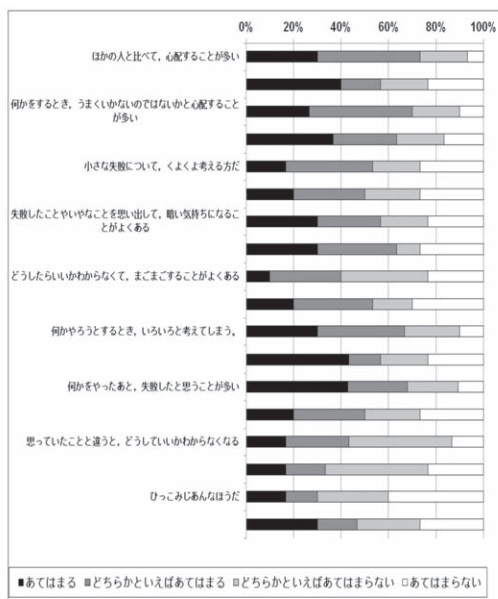


図3 授業観察学級の学習前後の「安心感」因子の各項目平均値の比較

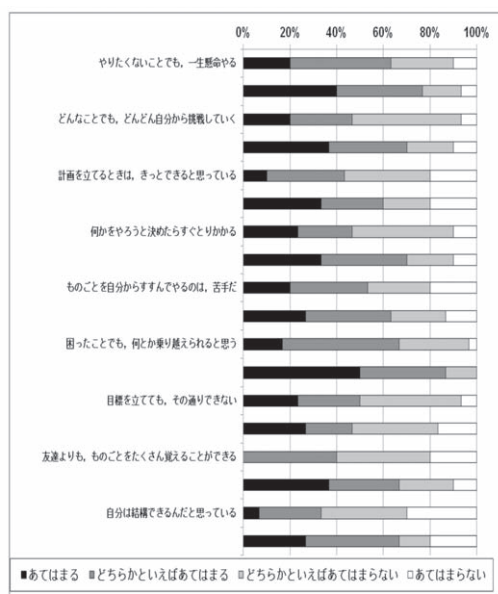


図4 授業観察学級の学習前後の「チャレンジ精神」因子の各項目平均値の比較

心感、チャレンジ精神ともに特に強い相関が認められた。安心感とチャレンジ精神の間に差がみられた項目は、「布をはさみで裁つことができる」、「まち針の正しいとめ方ができる」であった(表2)。授業観察学級の男子では、ほとんど相関がない項目が、男子全体より多かった。安心感、チャレンジ精神ともに、特に

強い相関がある項目は、「目的に応じた縫い方ができる」であった。安心感とチャレンジ精神の相関に大きな差がみられる項目はなかった。

女子全体では、男子全体ほど強い相関がみられなかった。安心感、チャレンジ精神ともに特に強い相関がみられた項目は、「手ぎわよく製作を進めるための工夫ができる」、「目的に応じた縫い方ができる」、「製作中に何かトラブルが起こっても、上手く対応することができる」、「布を用いた生活に役立つ物の製作について、自分なりに工夫ができる」であった。安心感とチャレンジ精神にあまり差がみられなかった(表3)。授業観察学級の女子は、ほとんど相関がない項目が、男子全体、女子全体、学級全体の中で最も多かった。最も強い相関がみられた項目は、「目的に応じた縫い方ができる」であった。安心感とチャレンジ精神に大きな差がみられた項目はなかった。

男女ともに強い相関がみられる項目が多く、製作技術に関して「できる」と思っている生徒ほど、一般性自己効力感が高いという結果となった。

### (3) 製作学習中の言動の観察結果

平成24年10月2日に観察した学級の製作学習は、ブックカバー製作の全12時間の最初の授業であり、製図・裁断の学習であった。男女混合の4~5人班で活動させた。次に、11月1日に観察した製作学習は、全12時間の3時間目の授業で、まつり縫い全2時間内の1時間目の授業であった。さらに、11月20日に観察した製作学習は、全12時間の7時間目の授業で、ミシン縫い全2時間内の2時間目の授業であった。

自己効力感が高いと思われたT(♂)、Ms(♀)は、班の代表として率先して布や自己評価表を取りに行くことが多く、授業に積極的に参加している様子であった。さらに、T(♂)は作業の説明の際、教師からの問いに対して手を挙げて発表する姿が多くみられた。作業が始まってからも、疑問がある時は、教師を呼び、教わりながら作業を進めていた。また、T(♂)は班の女子と協力しながら作業する様子が見られた。Ms(♀)は、黙々と作業をしていたが、時々隣の男女に教えている姿がみられた。自己効力感が高いと思われた男女は、周りの生徒との関わりが多かった。

自己効力感が低いと思われたMt(♂)、H(♀)の行動に共通点はほとんどみられなかった。H(♀)は特に目立った言動はなかったが、黙々と取り組んでいるという印象であった。一方Mt(♂)は、教師の説明を聞いていなかったり、他の班の生徒に話しかけたりする姿が多くみられ、作業に集中できていないようにみえた。Mt(♂)は、Ms(♀)に教えてもらって

表2 製作技術と自己効力感因子項目間の関係

(Pearson の積率相関係数：3 学級男子)

男子全体	安心感	チャレンジ精神
玉結びができる	.462**	.431**
玉どめができる	.603**	.606**
なみぬいができる	.268*	.255
返しぬいができる	.340**	.314*
三つ折りぬいができる	.235	.226
まつりぬいができる	.170	.196
ボタン付けができる	.366**	.365**
ミンシンの下糸巻きができる	.553**	.549**
ミンシンの糸かけができる	.606**	.575**
ミンシで直線ぬいができる	.404**	.367**
ミンシを安全に扱うことができる	.504**	.477**
チャコで布に印をつけることができる	.353**	.326*
布をはさみで裁つことができる	.555**	.465**
まち針の正しい止め方ができる	.636**	.591**
アイロンを安全に扱うことができる	.587**	.578**
作りたい物の型紙を作ることができる	.830**	.838**
目的に応じた縫い方ができる	.834**	.837**
製作実習中は自分の役割をこなし、協力することができる	.690**	.705**
布を用いた生活に役立つ物の製作について、自分なりに工夫ができる	.710**	.723**
手ざわよく製作を進めるための工夫ができる	.620**	.610**
製作中に何かトラブルが起こっても、上手に対応することができる	.636**	.653**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表3 製作技術と自己効力感因子項目間の関係

(Pearson の積率相関係数：3 学級女子)

女子全体	安心感	チャレンジ精神
玉結びができる	.308*	.287
玉どめができる	.213	.203
なみぬいができる	.430**	.410**
返しぬいができる	.218	.203
三つ折りぬいができる	.464**	.451**
まつりぬいができる	.175	.173
ボタン付けができる	.125	.104
ミンシンの下糸巻きができる	.255	.250
ミンシンの糸かけができる	.331*	.320*
ミンシで直線ぬいができる	.265	.251
ミンシを安全に扱うことができる	.464*	.426**
チャコで布に印をつけることができる	.390**	.369*
布をはさみで裁つことができる	.534**	.479**
まち針の正しい止め方ができる	.582**	.569**
アイロンを安全に扱うことができる	.523**	.523**
作りたい物の型紙を作ることができる	.665**	.677**
目的に応じた縫い方ができる	.788**	.783**
製作実習中は自分の役割をこなし、協力することができる	.635**	.642**
布を用いた生活に役立つ物の製作について、自分なりに工夫ができる	.751**	.752**
手ざわよく製作を進めるための工夫ができる	.788**	.787**
製作中に何かトラブルが起こっても、上手に対応することができる	.755**	.764**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

いたが、Ms (♀) が自分で作業をするよう注意しても、「俺不器用じゃけ。」と言うばかりで、積極性の無さが感じられた。これは、作業に対する自信の無さが原因で、製作に対する意欲をもてない状況ではないかと推察した。

質問紙の結果により、自己効力感の高かった N (♂)、S (♀) は教師の説明を集中して聞き、周囲の生徒と協力しながら作業を進めていた。N (♂) は班の女子

の作業を見てから自分の作品に取り組み、S (♀) は隣の男子に教えながら作業をしていた。自己効力感の高い生徒は、教師だけでなく、生徒とのふれあいも多いことがみて取れた。また、時間内にきちんと完成させようという意思が感じられる行動や教師の指示に従おうとする行動がみられた。

自己効力感の低かった Mt (♂) は教師に指導されながら、作業を進めていた。また、片付けを開始したとき、「合格でなかったら放課後やるん？」という確認をしており、授業外の時間に課題を行うことに消極的であった。また、同じく自己効力感の低かった Ms (♀) と自分の作業の進捗について話したり、作業中けがをした時に Ms (♀) が声をかけたりと、二人で会話する姿がたびたびみられた。Ms (♀) は、Mt (♂) の発言や行動を他の生徒より気にかけている様子であった。

以上をまとめると、自己効力感の高い生徒の特徴として、授業の最初の教師の説明をよく聞く、班の生徒に教えてもらう、他の生徒に教える、集中して作業する、という姿がみられた。生徒間のコミュニケーションが多く、学びあう姿勢が感じられ、作業内容をよく理解できていた。

一方、自己効力感の低い生徒の特徴としては、教師が作業の説明をしている時に絵を描く、授業に関係のない話をする、何度も教師に質問する姿がみられた。自己効力感の高い生徒に比べ、学習とは無関係な教師とのコミュニケーションが多く、授業に集中できていない様子がみられた。

#### (4) ポートフォリオの分析

今回のブックカバー製作において、教師が重視したことは、基礎的・基本的な技術の習得であった。限られた家庭科の授業時間の中で、生徒に力をつけさせ、さらに自分なりに工夫ができる題材である。ブックカバー本体は全員同じ布を用いて作るが、アップリケは配布したアイロンフェルトを自由に用いて、オリジナルの作品を作ることができる。

また、教師は授業の最初にその日の作業の説明をした後は、机間指導をし、生徒の進捗の差に対応した。生徒だけでは取り組みが難しく、時間がかかる作業は、教師が個別に説明したり例を示したりした。

これに加えて、ポートフォリオを工夫することとした。ポートフォリオ評価は、①子どもが達成したことが何であるかを子ども自身に明確に伝え、②どうしてそれが高く評価されることなのかをわからせ、③子どもの達成感や自尊心、あるいは自己効力感を高め、そして④次の課題が何であるかを示して自分の学習活動

をコントロールするためのメタ認知を育てることを意図するものである<sup>8)</sup>。ポートフォリオには、「教師の形成的評価」、「子どもの自己評価」、「メタ認知能力の育成」、「自尊感情・自己効力感を高める」の4つの意義がある。

自己効力感の高かったN(♂)のポートフォリオは、実施日、完成日、ブックカバー製作のポイント欄の未記入があった。また、各時間の自己評価の欄に、「できた」、「できなかった」、「終わらせた」など、一言で反省が書かれていた。作品が未完成のため、裏面への記入は無かった。

同じく自己効力感の高かったS(♀)は、ブックカバー製作のタブ付け②の時間以外は、全て記入してあった。S(♀)の自己評価の特徴として、自分の技術に対して肯定的な記述がみられ、その時間の反省だけでなく、次の時間への意欲やその作業のコツなど、次回に生かせる記述がみられた。裏面のブックカバー完成後の自己評価でも、「よくできた」、「できた」と答えていることから、製作に自信があると思われた。また、感想として、達成感があったことや自分だけでなく周りの生徒も一生懸命取り組んでいたという記述があった。

自己効力感の低かったMt(♂)は、実施日、完成日の未記入はみられたが、ブックカバー製作のポイント欄は、全て記入できていた。自己評価は、「きちんとできた」、「うまくできた」、「楽しくできた」など、一言であった。裏面への記入は無かった。

自己効力感の低かったMs(♀)は、実施日、完成日、製作のポイント、自己評価にそれぞれ未記入の欄があった。自己評価で、「できた」という言葉とともに、「がんばろう」や「次はもう少し早くできるようにしよう」など次の時間の学習への意欲が感じられた。裏面は、完成後の自己評価は未記入であったが、アップリケのオリジナルな点と友達2人からの作品の評価が書かれていた。作品を友達に見せ、交流したことがみとれた。

自己効力感の高い生徒は、「ずらさずに縫うことができた」、「まっすぐきれいに縫えた」などの自分の技術に肯定的な記述がみられた。一方、自己効力感の低い生徒は、「あと少し。がんばろう」、「もう片方もがんばろう」、「次はもう少し早くできるように」など、自分の進捗や状況を判断し、次の時間への意欲が感じられる記述がみられた。しかしながら、一般性自己効力感の低い生徒も本授業のポートフォリオを適切に利用している実態もみられた。

## 4. まとめ

中学生を対象として、学習意欲を高めるためのポートフォリオを導入した製作学習の前後に、製作及び製作技能への意識と自己評価及び自己効力感を問う調査を行い、さらに授業観察を通して、それらの関係を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 学習前後の調査結果の比較において、技術の習得については、小学校で学習経験のある技能及び中学校で初めて学習した技能ともに自己評価の高まりがみられた。さらに、それらを活用する力及び他者と協力する力についても自己評価が高くなり、本題材の学習成果が明らかになった。
- (2) 授業観察学級の学習前後の「安心感」因子の結果を項目別に比較した結果、学習後には「安心感」因子に影響するいくつかの項目に変化がみられ、自己効力感の高まりがみられた。
- (3) 授業観察学級の学習前後の「チャレンジ精神」因子の比較においては、すべての項目において差がみられ、学習前より学習後の方が自己効力感の高まりがみられた。
- (4) 家庭科の布を用いた製作に関わる技術と自己効力感の「安心感」、「チャレンジ精神」因子の項目間の関係については、男女ともに強い相関がみられる項目が多く、製作技術に関して「できる」と思っている生徒ほど、一般性自己効力感が高かった。
- (5) 製作学習中の抽出生徒の観察により、自己効力感の高低による言動の違いがみられた。高い生徒は、授業の説明を注意深く聞き、生徒同士で協力しながら、集中して作業をしていた。低い生徒は、教師に質問したり、他の生徒と遊んだり話したりする姿がよくみられた。
- (6) 自己効力感の高い生徒のポートフォリオには、自分の技術に対して肯定的な記述がみられたが、低い生徒には、みられなかった。しかし、低い生徒にも、現在の状況を判断し、次の時間の学習に意欲をもっている様子が見られた。
- (7) ポートフォリオにおいて、女子の自己効力感の違いによる記述内容の差は若干みられたものの、男子の自己効力感の違いによる記述状況の差や学習効果については捉えることができなかった。

生徒の日常の学習の様子等を併せて長期的に分析する必要がある。また、製作学習を通して、生徒の製作学習に関する自己評価が向上することが明らかになったが、まだ習得した技術を活用することについて自信



がない生徒もみられ、それらを活かす力を育てることが課題である。

## 【謝辞】

本研究を行うにあたり、授業観察、指導方法の検討及び調査にご協力を頂き、貴重なご意見を頂戴しました対象中学校の家庭科担当の先生をはじめ、生徒の皆様及び学校関係者、広島県教育委員会の皆様に深く感謝いたします。

また、平成24年度広島大学教育学部人間生活系コース4年生長尾栞さんには、卒業研究に取り組む中で、当研究の推進に多くの協力をしてもらいました。心より感謝と御礼を申し上げます。

本研究は、平成22年度～24年度科学研究費補助金基盤研究（C）、研究課題「生活実践への自己効力感の向上を促す家庭科ものづくり教育の再構築に関する研究」（課題番号：22530977、研究代表：鈴木明子）への助成を得て実施された。

## 【引用・参考文献】

1) 文部科学省：中学校学習指導要領（技術・家庭編）平成20年，2008

- 2) 小川裕子，後藤あゆみ：中学校家庭科「布を用いた物の製作」の授業—家庭科と美術科における実態と教師の意識の比較を通して—，静岡大学教育学部研究報告，第43巻，pp.179-189，2012
- 3) PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）2003年調査，2003
- 4) 扇澤美千子，川端博子：被服製作学習への意識と自己効力感の関連—大学生の調査による考察，茨城キリスト教大学紀要，第43巻，pp.37-48，2009
- 5) 成田健一，下仲順子，中里克治，河合千恵子，佐藤真一，長田由紀子：特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—，日本教育心理学会，教育心理学研究43（3），pp.306-314，1995
- 6) 三宅幹子：特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響—課題成績のフィードバックの操作を用いて—，日本教育心理学会，教育心理学研究48，pp.42-51，2000
- 7) 福井至他：「児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度改訂版（GSESC-R）の作成」，日本行動療法学会第34回大会発表論文集，pp.240-241，2008
- 8) 鈴木克明：『放送教育』第3回「総合的な学習の時間をどう評価するか」—ポートフォリオ，フィードバック，アカウンタビリティ—，2000